

北部イランの鉄器時代編年の問題について：タッペ ・ジャラリエ遺跡の成果から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/36247

第 37 回 金沢大学考古学大会

2011 年 10 月 8 日、第 37 回金沢大学考古学大会を開催しました。本号では、発表の一部の概要を掲載します。

■大会発表タイトル及び発表者

足立 拓朗（人間社会研究域歴史言語文化学系）

「北部イランの鉄器時代編年の問題について—タッペ・ジャラリエ遺跡の成果から—」

柳生 俊樹（長野市埋蔵文化財センター）

「前漢時代の帯飾板における鹿形怪獣紋について—歴史的・文化背景に関する憶測—」

魚水 環（石川県埋蔵文化財センター）

「近年の七尾城跡発掘成果から見る中世七尾城下町の様相」

垣内 光次郎（人間社会環境研究科 D2、石川県埋蔵文化財センター）

「能登志加浦窯の調査—能登における瓷器系陶器生産の研究—」

坂本 圭佑（人間社会環境研究科 M2）

「ホンジュラス、コパン遺跡における調査報告」



北部イランの

鉄器時代編年の問題について

—タッペ・ジャラリエ遺跡の成果から—

足立拓朗

1. はじめに

北部イラン、ギーラーン州では東京大学の調査が 1950～1970 年代に実施されており、大部の報告書が刊行されている（江上編 1965; 江上・深井・増田編 1966; 曾野・深井編 1968; 深井・池田編 1971; 深井・松谷編 1982）。また調査成果による土器の編年研究も提示された（三宅 1976; Takano 1982）。1980 年代に入って、欧米の研究者による同地域の編年研究が新たに加わった（Haelinck 1988）。1990 年代には、ギーラーン州で最大の墓地遺跡であるマ

ルリーク（Marlik）遺跡の発掘報告書も刊行された（Negaban 1996）。

しかし、北部イランの編年研究にはいまだ問題が多い。鉄器時代については複数の編年案が提示されているが、墓地遺跡から出土した遺物の型式学的な比較研究のみで構築されており、層位的な裏付けがなされていない。このような状況の中、2002 年からイラン文化遺産庁と中近東文化センターによるジャラリエ（Jalaliye）遺跡の発掘調査が開始された。この調査については、本報告が発表されている（Ohtsu et al. 2006）。本発表の目的は、これまでの研究の枠組みにジャラリエ遺跡の成果を加えて、ギーラーン州の鉄器時代の土器組成を検討し、特に鉄器時代 III 期について土器編年の枠組みを提示することである。

2. ジャラリエ遺跡の歴史的・地理的重要性

ジャラリエ遺跡はアルボルズ山脈を貫流するセフィード川の中流域に位置する。前記のマルリーク遺跡と東京大学が調査したハリメジャン（Halimehjan）遺跡群に挟まれた地域であり、古墓遺跡の密集地域であることが知られている。ジャラリエ遺跡の近隣には、マルリーク遺跡と並んで著明な遺跡であるキールラズ（Kaluraz）遺跡群（Hakemi 1968）がある。

ジャラリエ遺跡はセフィード川中流域を一望できる小高い自然丘上に位置する。古代イランの基幹ルートが解明できているわけではないが、アルボルズ山脈を縦断するセフィード川流域が基幹ルートの役割を果たしていたと仮定すれば、ジャラリエ遺跡はカスピ海へ抜けたり、逆にイラン高原へ出るための重要なルートを監視することができる場所であろう。

ジャラリエ遺跡では三つの文化層が確認されており、最上層の I 層から幅約 2.5m の大型の壁が検出されている（Ohtsu et al. 2006）。このような大型の壁は単なる住居とは考えにくく、遺丘全周を取り巻く防御用の都市壁である可能性が考えられる。I 層の時期は、出土土器の研究からパルティア前期と考えられる（足立 2003a）。

ジャラリエ遺跡 II、III 層は、出土土器の比較から鉄器時代に属するが（大津 2003）、イランの鉄器時代は長期間に及んでおり、これらの層の年代的な位置付けをさらに細かく検討する必要がある。北部イランの鉄器時代はハサンル（Hasanlu）遺跡の成果か

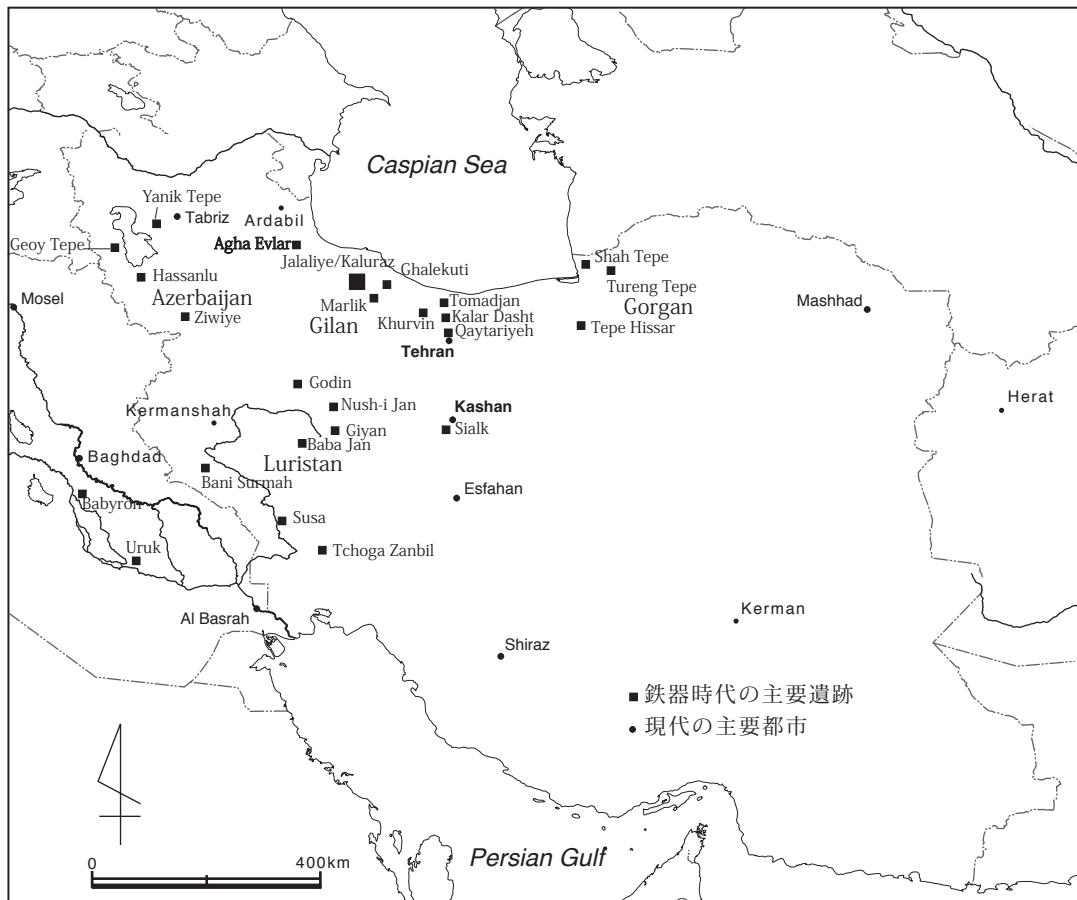


図1 イラン鉄器時代の主要遺跡

ら編年の枠組みが構築されているが、北部イランだけでも地域によって、研究者間に年代観の相違が見られる (Dyson 1965, 1989; Haerinck 1988; Institut Français de Recherche en Iran 2001; Levine 1987; Pigott 1981; Young 1985)。本発表では北部イランの中央部に位置するギーラーン州に限定して編年を検討する。

3. ギーラーン州鉄器時代の時代区分について

北部イランにおいて青銅器時代から鉄器時代を通して層位的な発掘調査報告が成されているのはハサンル遺跡であり、1960年代から編年の基準となってきた (Dyson 1965)。1989年に成果の再考がなされ、鉄器時代の時代区分は、鉄器時代I期 (V層：前1450-1250年)、II期 (IVC層：前1250-1100年、IVB層：前1100-800年、IVA層：前800-750年)、III期 (IIIB層：前750-600年)、メディア・アケメネス朝ペルシア (IIIA層：前600-300年) と年代付けされた (Dyson 1989)。この成果の発表前の1988

年にE.ハーリンクはギーラーン州鉄器時代の時代区分を発表している。その年代観は、鉄器時代I期 (前1500/1400-1000年)、II期 (前1000-800年)、III期 (前800-500年)、IV期 (アケメネス朝ペルシア) である (Haerinck 1988)。両者の区分ともアケメネス朝ペルシア以前の鉄器時代を三つに分けるという、西アジアの鉄器時代研究として伝統的なスタイルである。

このハサンル遺跡の編年とハーリンク編年には鉄器時代II期の年代に相違があり、注意が必要である。このハーリンク編年を検証するという作業がギーラーン州鉄器時代編年を再考するという作業となる。ハーリンク編年の具体的な土器組成は、東京大学のギーラーン州内での一連の調査 (江上編 1965; 江上・深井・増田編 1966; 曾野・深井編 1968; 深井・池田編 1971; 深井・松谷編 1982) の資料を使用しており、ハーリンク編年と東京大学の調査所見を整理することが具体的な検証作業ということになる。

また、ハーリンクは引用していないが、三宅俊成に

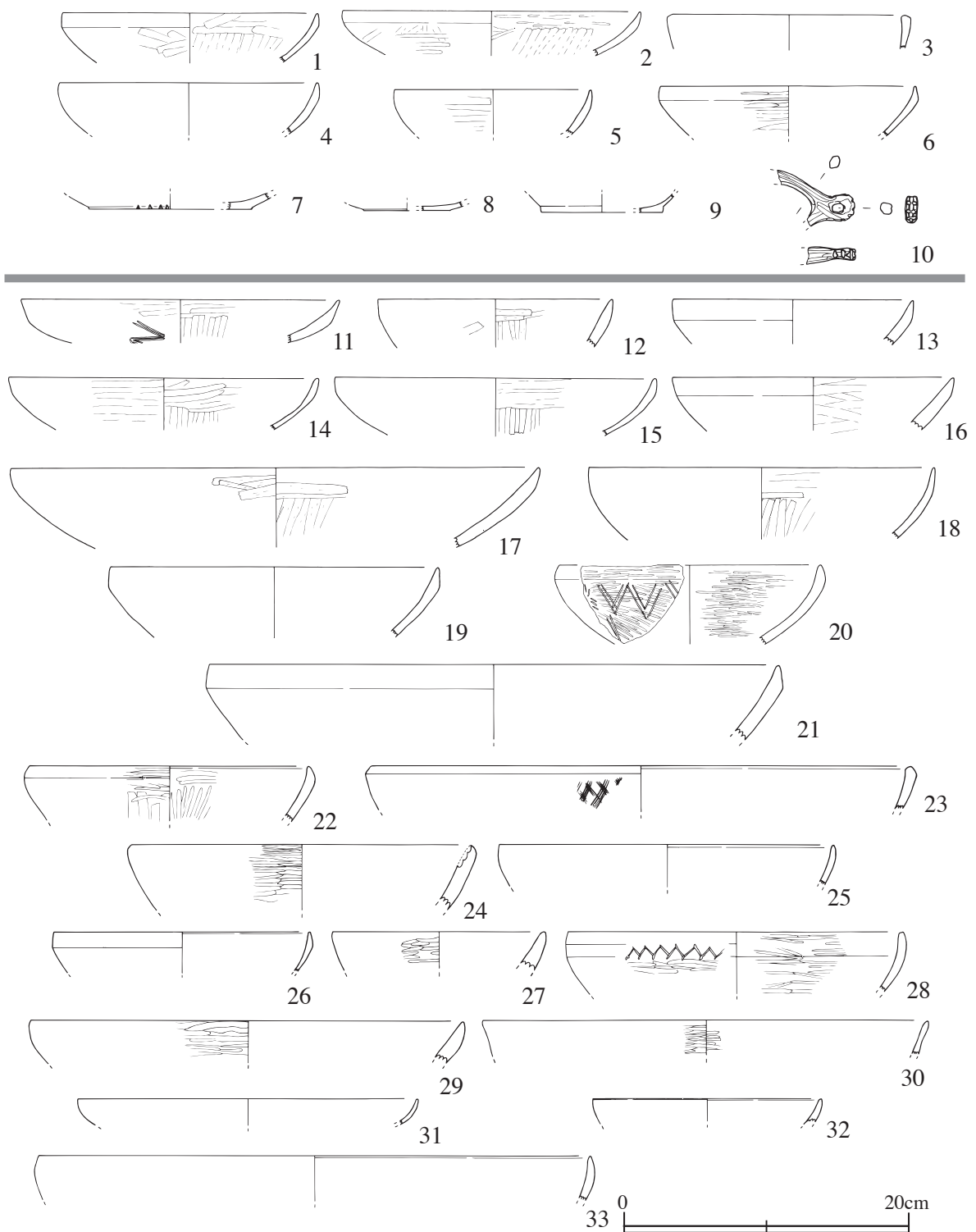


図2 タッペ・ジャラリエ遺跡出土の三角形口縁鉢 : Layer II: 1-10 (1- 3: Ohtsu et al 2004a: Fig.147: 79- 81; 4- 10 Adachi 2005b: Fig.35), Layer III: 11-33 (11- 20 Ohtsu et al 2004a: Fig.148: 91- 97, 99-101; 21- 33: Adachi 2005b: Fig.42).

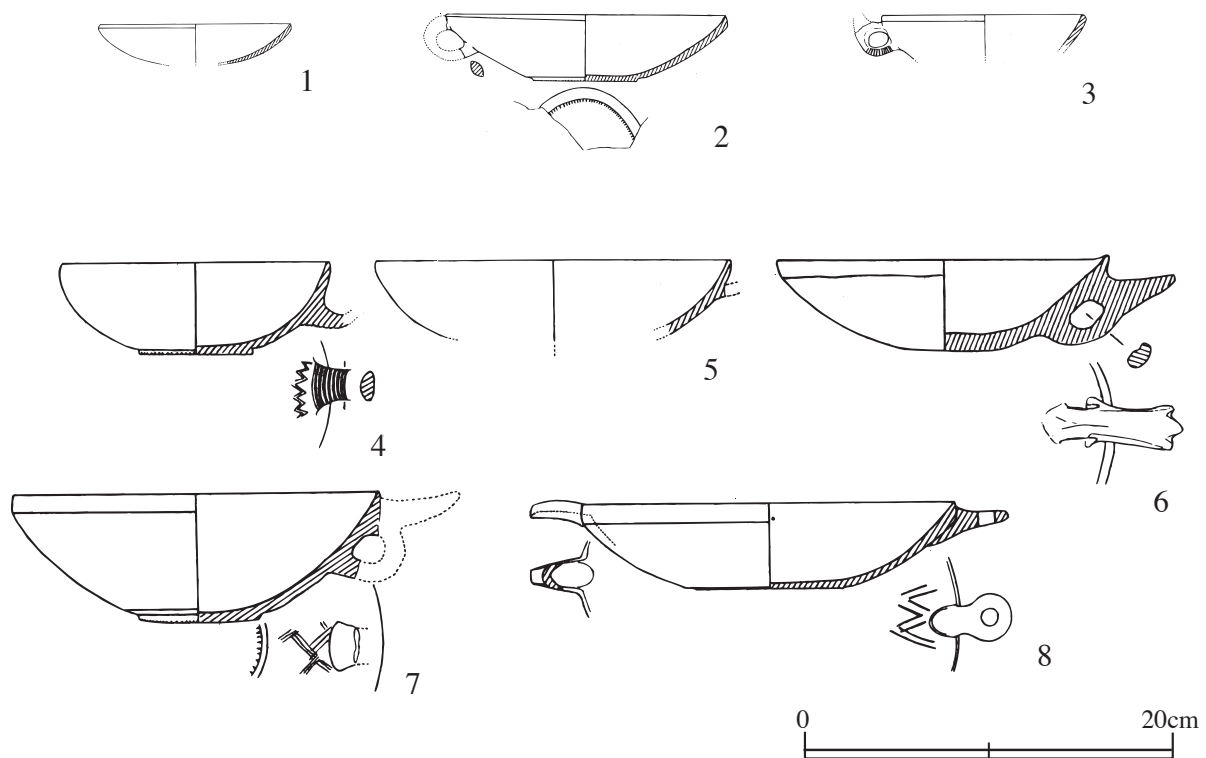


図3 ガレクティ遺跡出土の三角形口縁鉢: 1-3 (Egami 1965: Fig.51: 1-3), 4-8 (Egami 1965: Fig.66: 10-14).

よって東京大学の調査による青銅器時代～パルティア期に至るギーラン州の編年観が提示されている(三宅 1976)。この成果は東京大学の各報告書の所見と必ずしも一致してはいないので、ハーリンク編年、東京大学各報告書の所見、三宅編年の三者を比較することが肝要となる。

東京大学はデーラマン盆地で調査された文化層・古墓をノールズマハレ下層(シャー・テペIb: 前3千年紀後半)、ガレクティI群(青銅器時代末～鉄器時代初期)、II群(アケメネス朝ペルシア)、ハッサニマハレ群(パルティア後期)の四群に分類している(図2)(曾野・深井編 1968; 深井・池田編 1971)。ガレクティI群とは青銅製利器・有頸大型深鉢を有し、II群は鉄製利器を有する。ハッサニマハレ群は三長足付壺を特徴とする。

三宅はこの東京大学の調査成果を発展させ、A類(青銅器時代)、BI類(鉄器時代前期)、BII類(鉄器時代後期)、CI類(アケメネス朝ペルシア)、CII(パルティア後期)に区分した(三宅 1976)。東京大学の設定したガレクティI群が三宅A類とBI類に細分され、ガレクティII群が三宅BII類とCI類に細分されている。この細分を可能にしたのは、2点の新たな分析手法を

導入したことによる。第一に身部が鉄製、柄部が青銅製のバイメタル製品(剣)を伴うコンテクスト(BI類)を新たに設定した事、第二に追葬の存在を認識した事である。

ハーリンクは三宅編年を引用していないが、その分析方法(バイメタル製品・追葬)は同じである。そのため三宅編年と時代のずれはあっても同一の集団を抽出している。ハーリンク鉄器時代I期は三宅A類、ハーリンクII期は三宅BI類、ハーリンクIII期は三宅BII類である。

ハーリンク編年も三宅編年も東京大学の調査成果を「バイメタル製品」と「追葬」の2点から新たに分析したものであり、両者の意見交換はなかったと思われるが、期せずして同一の結論へ辿り着いている。そこで、次に「バイメタル製品」と「追葬」について検討を加える。

バイメタル製品については、発表者はすでに何度か論じている(Adachi 2003; 足立 2002,2004)。拙稿の分析結果ではバイメタル製品の使用される時期は前1200～800年頃である。この年代付けはハサンル遺跡のIV層の時期と対応しているものであり、ハーリンクはII期の年代をバイメタル製品の所属年代を基

Egami (ed.) 1965, Egami, Fukai and masuda (eds.) 1966,
Sono and Fukai (eds.) 1968, Fukai and Ikeda (eds.) 1971

Arimatsu 2005, 2007

Noruz Mahare Lower Layer			Late Bronze Age Noruz Mahare Lower Layer	
	Miyake 1976	Haerinck 1986		
Galekuti I from the end of the Bronze Age to the Early Iron Age Galekuti I : A-I,II,III,VII, VIII, C-I,II,IV,D-I,II,III, E-7,G-8,9,H-10, Galekuti II : 1,4, 7(C14:1000B.C.)	Group A: the Bronze Age Lasulkan II,Va,Vb,V-3 Ghalekuti I : A-I-VIII, C-I,II,IV, D-1,2,E-6,7,G-8-10	Iron Age I (from 15/14th to 11th century B.C.) Ghalekuti A:I-III,V-VIII, C-II,I-6(E) Lameh Zamin 102,108,110	Iron Age I-1 Ghalekuti I: A:I-VIII, B:I-III D1, D2, E6, E7, G8, G9, (S10, S12) H10 Laslkan II, Va, Vb Iron Age I-1 Galekuti I: C:I-IV	
	Group B-I :the Early Iron Age Ghalekuti II: 4	Iron Age II (10-9th century B.C.) Ghalekuti II: 4 Lameh Zamin 101,103,105,107	Iron Age II Ghalekuti II: 4 Laslkan IV	Tappe Jalalye
Galekuti II Achaemenid Ghalekuti I: B-III, I-T5, II: 2,3,5,6	Group B-II:Late Part of the Early Iron Age Lasulkan IV,Iv,b, Vb Ghalekuti I: A-V,B-I,III,C-IU, F, G-9	Iron Age III (8-6th century B.C.) Ghalekuti A-V Upper layer, B-III,C-I	Iron Age III Ghalekuti I: A-V Upper layer, B-III (surrounding), C-I (Layer I-III)	Layer III Layer II
	Group C-I: Achaemenid? Ghalekuti I: G-9 Ghalekuti II: 2,3,5,6	Iron Age IV (Achaemenian period)	Iron Age IV Galekuti I: G9, (S6, S7) Galekuti II: 2, 3, 5, 6	Layer I
Hassani Mahare Late Parthian Period Hassani Mahale 1,3-8	Group C-I : Late Partian Period Noruzmahale A-I,II,B-I,II, B-IV-VII,C-I, D-I-IV,VI,E-I Khoramrud I,A-VI Hassanimahale : 1,3,4,5,6,7,8 Ghalekuti I: F		Arsacid period Hassani Mahare Noruz Mahare	Layer I, Structure 3

図4 北部イラン、ギーラーン州の鉄器時代編年

準にして導きだしているが、ハサナル IV 層の年代（前 1250～750 年）に対応させて変更するべきである。

4. 「追葬」とジャラリエ遺跡 II、III 層

追葬が問題となるのはガレクティ I 号丘の A-V 号墓と C-I 号墓である。これらの墓に追葬としての二次埋葬を認めることにより時期区分が可能となっている。三宅は「古墓と土器と金属利器との関係」と題する表（三宅 1976:306-7）で A-V 号墓を「封土」と「床面」、C-I 号墓を「上層」と「床面」に明確にコンテキストを分離することで、結論を導き出している。ただ C-I 号墓については「可なり盗掘や追葬？などのために混乱している」と述べ（三宅 1976:315）、明確に追葬の存在を認める立場に立っていないようにも窺える。

ハーリンクはガレクティ遺跡だけでなく、トマジヤ

ン（Tomadjan）遺跡、マルリーク遺跡にも追葬が認められるとして、このような埋葬を注意深く認識することの重要性を述べ、I.N. メドヴェツカヤの青銅剣の型式編年（Medvedskya 1982）や O.W. マスカレラ氏のフィブラによるマルリーク遺跡の年代観（Muscarella 1984）を批判している（Haerinck 1986: 65）。

ギーラーン州で調査されたのは墓地遺跡が殆どであり、遺構の前後関係を探るには切り合い関係か、掘り込み面の検出が必要となるが、そのような層位的な好例は殆ど報告されていない。そのため、「追葬」が確認できれば大きな研究の進展になるが、報告書自体でその存在を強く提示していない以上、その検証は困難であった。

しかし、ジャラリエ遺跡の出土品を分析に加える

ことにより、これまでは副葬品だけであった分析対象を、生活用品の側面からも論ずることが可能になった。ジャラリエ遺跡の出土品は殆どが小さな土器片であるが、器形の復元はある程度可能であり、長頸壺、短頸壺、把手付皿、嘴形注口壺などの器形の認定を行い、その変遷を探ることができた。特に重要な点はジャラリエ遺跡 III 層が B-III 号墓や C-I 号墓上層と同じ土器群を含んでいることであり、ハーリンク編年の鉄器時代 III 期（三宅編年の IIB 類）の存在を層位的に証明することができた。

ジャラリエ遺跡 II、III 層で特徴的な器形に断面が三角形を呈する口縁があり（図 2:1-33）、これらはガレクティ遺跡 B-III 号墓（江上 1955: 図版 66-12-14）で出土している（図 3: 1-8）。この器形に特徴的な水平把手やジグザグの刻文がジャラリエ III 層（図 2: 7, 10, 28）でもガレクティ遺跡 B-III 号墓（図 3: 2, 4, 6, 8）でも出土している。

また、比較的口径の小さい壺型土器の口縁がジャラリエ遺跡 III 層で出土しており、これらはガレクティ遺跡 C-I 号墓上層で出土している（江上 1955: 図版 73-1-6）。これらの土器の頸部には複数の沈線が水平に巡るが、この特徴的な装飾もジャラリエ III 層で出土している。

この二つの器形（把手や注口を有し刻文装飾を持つ皿形あるいは鉢形土器、把手や注口を有し頸部に水平沈線文を持つ壺形土器）は高台に刻みを持つとという珍しい特徴を持っており、ジャラリエ III 層でもガレクティ B-III、C-I 号墓上層でも見出す事ができる。この二つの器形からジャラリエ遺跡 III 層とガレクティ遺跡 B-III、C-I 号墓上層（ハーリンク編年 II 期・三宅編年 BII 類）を同時期であると指摘したい。この二つの器形について三宅氏は、BII 類の特徴である比較的良質の胎土で、焼成も良好な赤褐色土器であり、他の群とは明確な差異を有する、と指摘している（三宅 1976:327）。ジャラリエ遺跡のこの二つの器形もやはり精製の赤褐色土器である。

ジャラリエ遺跡 III 層とガレクティ遺跡 B-III、C-I 号墓上層が同時期であることを提示したが、ジャラリエ遺跡でしか確認されない特徴的な器形も存在していることから、これも指摘しておかなければならないだろう。ジャラリエ遺跡 II、III 層では大型の甕形土器が出土している。口縁部片・胴部片共に出土し

ているものの、その口径・胴部径を推定するには至っていないが、おそらく口径は 50cm 以上と考えられる。胴部表面には叩き痕があり、胎土は黄褐色から赤褐色であり、砂粒を多量含んでいる。土器片が非常に大きく厚いこと、特徴的な叩き痕を有することから、この時期の指標として使える土器である。このような大型の甕形土器はガレクティ遺跡では出土していない。

また、ガレクティ遺跡で出土せず、ジャラリエ遺跡で出土している器形に嘴形注口土器が挙げられる。同様な器形は、マルリーク遺跡、テヘラーン州のカイタリーヤ（Qaytariyeh）遺跡、フルヴァン（Khurvin）遺跡で類例があり、発表者はこれらを北部イラン中央部に分布する嘴形注口土器 IV 類と分類している（足立 2003b）。嘴形注口土器 IV 類はジャラリエ遺跡 II 層で出土していることから、前 8 世紀以降という年代、つまり鉄器時代 III 期（III 期については前 8～6 世紀で研究者の意見は一致している）と年代付けることが可能である。

ジャラリエ遺跡 II 層と III 層の出土土器群の器形は同一であるが、II 層には刻文や沈線文が殆ど見られないということが指摘できる。今後の土器研究の進展によって、鉄器時代 III 期をさらに細分できる可能性を秘めていると考えられる。

5. まとめ

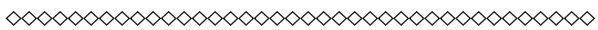
以上の成果を基にギーラーン州鉄器時代の編年を再構築するなら、図 4 のように表せる。最近では有松唯も同様な分析を行い、ほぼ同じ結論にいたっている。ジャラリエ遺跡の調査により、ハーリンクや三宅の編年案の一部については裏付けることができた。しかし、裏付けることができたのは鉄器時代 III 期に相当する部分だけである。今後、鉄器時代 I 期、II 期に相当する時期の研究の進展が期待される。北部イランでは多数の墓地遺跡がこれまで確認されており、多くの遺物が出土している。それらの中には中央アジアやメソポタミアから搬入されているものも多く、それらによって年代を把握することができる反面、在地の遺物の編年が確定できないことから、それぞれの墓の構築年代が不明であったり、出土遺物に年代幅がみられるなど、多くの問題があった。一部とはいえ、北部イランの鉄器時代の編年に見通しがえられたことで、中央アジアやメソポタミアから搬入された遺物の年代もよ

り正確に論じることができるようになる。今後はさらに編年を整理することと同時に北部イランに搬入された遺物についての考察も進めていく必要がある。

参考・引用文献

- Adachi, T., 1998 The Fine Carinated Bowl in Levant. *Bulletin of Ancient Orient Museum* 18: 41-55.
- Adachi, T., 2003 The Development of the "Ear" Pommel Sword in Northwestern Iran. *Bulletin of the Okayama Orient Museum* 19: 25-37.
- Adachi, T., 2004 Tentative Chronological Sequence of Bow-Tie Designs in Baba Jan III Painted Ware. *Orient* 39: 79-95.
- Arimatsu, Y., 2005, Ceramic Chronology of the Iron Age to the Parthian Period in the Daylaman District, Iran. *Proceedings of the 10th Conference of the Japanese Society for the Western Asian Archaeology*, Kanagawa, the Japanese Society for the Western Asian Archaeology, 34-38.
- Arimatsu, Y., 2007, Regional Variability of the Iron Age Pottery and its Temporal Changes on the Southwest Caspian Coast. *Journal of West Asian Archaeology* 8: 87-102.
- Dyson, Jr., R.H., 1965 Problems of Prehistoric Iran as Seen from Hasanlu. *Journal of Near Eastern Studies* 24: 193-217.
- Dyson Jr., R.H., 1989 Reconsidering Hasanlu. *Expedition* 31: 3-11.
- Fahimi, H., 2000 *The Culture of Iron Age in South West Coasts of the Caspian Sea : from Archaeological View Point*, Samira Publication, Tehran (in Persian).
- Haerincx, E., 1988, The Iron Age in Guilan - Proposal for a Chronology. *Bronzeworking Centres of Western Asia c. 1000 - 539 B.C.* London and New York, Kegan Paul International.
- Hakemi, A., 1968, Kaluraz et la civilization des Mards, *Archaeologia Viva* 1: 63-66.
- Institut Français de Recherche en Iran, 2001 *Les recherches archéologiques Françaises en Iran*. Tehran and Paris, Musée National d'Iran and Musée du Louvre.
- Levine, L.D., 1987 The Iron Age. *The Archaeology of Western Iran*. Washington, D.C. and London, Smithsonian Institution Press.
- Medvedskaya, I.N., 1982 *Iran: Iron Age I*. Oxford, BAR International.
- Muscarella, O.W., 1984 Fibulae and Chronology, Marlik and Assur. *Journal of Field Archaeology* 11: 413-9.
- Negahban, E. O., 1996 *Marlik: The Complete Excavation Report*, vol. 1, 2. Philadelphia, the University Museum, University of Pennsylvania.
- Ohtsu, T. (ed.), 2002 *Archaeological Survey in Northwestern Iran - Report on the general survey in Gilan and its surrounding areas*, The Middle Eastern Culture Center in Japan.
- Ohtsu, T., J. Nokandeh and T. Adachi, 2004 Excavation Research of Tappe Jalaliye. *Preliminary Report of the Iran Japan Joint Archaeological Expedition to Gilan, Second Season, 2002*. Tehran and Tokyo, Iranian Cultural Heritage Organization and Middle Eastern Culture Center in Japan, 48-83.
- Ohtsu, T., Nokandeh, J., Yamauchi, K., and Adachi, T. (eds.), 2006 *Report of the Iran Japan Joint Archaeological Expedition to Gilan*, Tehran and Tokyo, Iranian Cultural Heritage and Tourism, and the Middle Eastern Culture Center in Japan.
- Pigott, V.C., 1981 *The Adoption of Iron in Western Iran in the Early First Millennium B.C.: An Archaeometallurgical Study*. Michigan, University Microfilms International.
- Young Jr., T.C., 1985 Early Iron Age Iran Revisited: Preliminary Suggestions for the Re-analysis of Old Constructs. In J.-L. Hotu, M. Yon and Y. Calvet (eds.) *De l'Indus aux Balkans, recueil à mémoire de Jean Deshayes*. Paris, Editions Recherches sur les civilisations, 361-378.
- Takano, M., 1982 Relative Chronological Difference of Lameh Zamin Pottery. 深井晋司・松谷敏雄 (編), 55-62.
- 足立拓朗, 2002 「ルリスタン出土の青銅剣と鉄芯青銅剣 (耳形柄頭長剣)」 紺谷亮一・大津忠彦・足立拓朗 (編) 『古代イラン秘宝展』岡山市立オリエント美術館・中近東文化センター, 98-101.
- 足立拓朗, 2003a 「パルティアの精製土器にみるヘレニズム時代の地域性」『第10回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』ヘレニズム～イスラーム考古学研究会, 8-15.
- 足立拓朗, 2003b 「イラン鉄器時代の嘴形注口土器の変容」第45回総会・大会：研究発表配付資料.
- 足立拓朗, 2004 「古代イラン青銅製柄孔付斧の編年試案」『西アジア考古学』5: 25-36.
- 江上波夫 (編), 1965 『デーラマン I—ガレクティ・ラスルカンの発掘—』東京大学東洋文化研究所.
- 江上波夫・深井晋司・増田精一 (編) 1966 『デーラマン II—ノールズマハレ・ホラムルードの発掘—』東京大学東洋文化研究所.
- 大津忠彦, 2003 「2002年度イラン遺跡調査—「日本・イラン共同調査団」によるセフィード・ルード川流域 (ギーラーン州) における考古学調査—」『平成14年度 今よみがえる古代オリエント 第10回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会, 51-56.

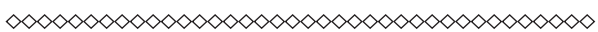
曾野寿彦・深井晋司(編), 1968『デーラマンⅢ—ハッサニ・マハレ、ガレクティの発掘—』東京大学東洋文化研究所。
深井晋司・池田次郎(編), 1971『デーラマンⅣ—ガレクティ第Ⅱ号丘、第Ⅰ号丘遺跡の発掘』東京大学東洋文化研究所。
深井晋司・松谷敏雄(編), 1982『ハリメジャンⅡ—ラメ・ザミーンの発掘—』東京大学東洋文化研究所。
掘 眺, 1985「イランの土器」『世界陶磁全集 20 世界(1)』小学館, 149-173。
三宅俊成, 1976「デーラマン古墓出土の土器の考察」『江上波夫教授古稀記念論文集 考古・美術編』山川出版社, 297-334。



ホンジュラス、コパン遺跡における調査報告

坂本 圭佑

コパン遺跡はホンジュラス共和国の西部に位置する遺跡である。古典期マヤの時代には最盛期を迎えた。昨年の9月から10月にかけて、筆者はコパン遺跡で資料調査を行ってきた。この調査はホンジュラス国立人類学歴史学研究所、コパン考古学プロジェクトディレクターの中村誠一氏のご協力のもと無事に行うことができた。今回の調査の目的は、古典期コパン遺跡におけるヒスイ製品の加工過程を復元するために必要な遺物の資料化であった。具体的な調査としては、未製品、製品、砥石、穿孔具と思われる物のリストの作成、写真撮影、実測図の撮影を行った。その結果、ヒスイ製品加工過程の復元が可能の見通しを立てることができた。特に、埋葬から一括で出土したヒスイ未製品群を分析できたことは大変貴重な経験であった。現在はこの未製品群からは一連の加工過程の復元を、製品別の未製品からは製品別の加工技術の使用に関して知見が得られると考え、研究を進めている。



近年の発掘成果から見る中世七尾城下町の様相

魚水環

能越自動車道の能登氷見線計画の発表により、石川県埋蔵文化財センターは平成17年度から道路建設予定地の発掘調査を行っている。発表では、この概要と、近年の七尾市教委による調査成果も含め、併せて16世紀七尾城下町の様相の片鱗を推察した。

現在までの調査による主な成果としては、惣構堀の検出(H19)、大手道の検出(教委H10・H19)、屋敷地の区画整備状況の確認(教委H7)、また染物関連施設(H18)や円面硯の出土(H21)、多量の土師器皿の出土(各年)、金の付着した埴塼(H17)やトリベ(教委H8～10)等の鍛冶関連遺物の出土が挙げられる。殊に鍛冶関連遺物については、16世紀後半の畠山家による金山開発の試みと併せて考えても興味深い。

これまで七尾城は、能登国における中央集権化が発達した象徴として現れてくる、行政・軍事・経済の一大拠点であるという理解が歴史学的見地からなされてきたが、考古学的見地からも、その裏付けが進んでいると言えよう。



編集後記

『金大考古』72号は、これまでよりずいぶん遅れての刊行となりました。また、第37回金沢大学考古学大会を紹介するだけの内容となってしまいました。昨年11月には、編集作業を引き継いでいたにもかかわらず、このような結果となってしまい、関係者に対して謹んでお詫び申し上げます。『金沢大学考古学研究紀要』33号に関する編集作業と重なり、本誌の編集作業が後回しになったことが主な原因です。また、昨年、ご送付いただいた原稿を『金沢大学考古学研究紀要』34号に掲載されるように調整したことが分量が少なくなった理由となっています。

これまでの経験をふまえて、より迅速にまた多くの内容を掲載する『金大考古』を目指していく所存です。今後とも、ご協力・ご指導を賜りますようお願い申し上げます。(足立)